

街場の就活論

Vol. 6

—新卒採用に今、何が起きているのか—

2012年春入社就職活動が、終息に向かっています。電車の中には、疲労気味のリクルートスーツ学生が増え始めています。彼等を見ると「就職活動は自分に合わない」と結論づけるのもありだぜ、と無責任に思うのであります。

団 遊 (だん あそぶ)



講演より公園！ 遊んで気付く キャリアの入り口!?

とある学校から、初年次のキャリア教育プログラムについて相談を受けました。初年次とは、大学1~2年生時のコトを指します。早期に職業観や社会で生きるとは!?! を伝えていくことは、どの大学でも今、とても重要なことと捉えられているようです。

「思いっきりみんなで遊びに行くというのはどうですか？」と僕は答えました。別にふざけているわけではありません。「職業観やキャリアは教えることができる」という思い込みから、職員や教員は抜け出した方がいいと思ったのです。

僕は、気付けば5年あまり「キャリア」をテーマに授業をしたりしていますが、一度もキャ

リアを教えるという立場に立ったことはありません。教えるほどの知識蓄積もありません。一時、臨床キャリア論とか言っていましたが、それは誰にでも語れることであって、つまりキャリアは生きることそのものだと思います。生き方を人に教えるなんて、宗教家でもそんなにおこがましいことは言わないぞ、と冷やかに見えています。

ところがキャリア教育という言葉が広がると、その効果が期待され、やがて結果が求められます。その先で、人生は損得で語られるようになり、「損をしない人生」を指導しようと、就職活動に成功する方法の授業が流行り……と、人の可能性を、キャリア教育という名のもとでどんどん狭めていくようなスキームが描かれていきます。鼻の利く人がビジネス化していく側面もあるのでしょう。頭髪、肥満といった劣等感あり系のビジネスは、劣等感の維持にいつの時代も躍起です。キャリア教育も「最近の若者は

だらしない」という不確かなムードの影響で、世の中が漠然とした期待を持ち、ビジネスというフィルタを通して自分たちがコントロールしやすいようにパッケージしていった。その形が、今日的なキャリア教育だともいえるでしょう。

「思いっきりみんなで遊びに行くというのはどうですか?」。この提案で僕が考えたことは、例えば公園に行って散々遊んだ後に、みんなで輪になり、「公園ってそもそも何?」「これ必要?」などをざっくばらんに話そうぜと思ったのです。そこに、きっと学び(気づき)の種があるからです。



↑これもいい教材だと思う! たぶん。

僕のキャリアの授業はインターンシップ体験を軸に構成されています。行く前と行った後が、いわゆる授業です。その中では、以前も書きましたが、たくさんの先輩にキャリアインタビューすることで「人はいろいろ決断して生きている」ということに気付いてもらおうとしています。

けれど、学生の声を拾ってみると「団さんの授業はたのしかった! 役立った!」と言ってくれるものの「どこが?」と聞くと「インターンシップ先で、初日とにかくフロア中の名前を覚えろと言ってくれた」「メモを必ず持ち歩けと言ってくれた」「言った通りやったら本当に可愛がってくれた」など、具体的な処世術が多く出

てきます。

これはこれで、大事なことだと思っているのですが、本当に伝えたかったことと伝わったことは違う、という多くの年配者が感じる感想に、僕もいきつきます。ところが、インターンシップの現場に表敬訪問して30~40分ほどのミニ授業をしたときは、手ごたえが違います。緊張感の中、ピンピンに感じているので、聞いてくることが違うし、入り方が違うのです。

「担当部長と何とか食事に行きたいと思うのですが、話しかけることすらできません。なぜでしょうか?」

こんな質問は、授業ではまず出てきません。そして、こんな生な会話が、何よりも学生自身がキャリアを考えるきっかけになりえると、僕は考えるのです。

今週は釣りに行きます。来週はバーミヤンでご飯を食べます。再来週はJリーグの試合を見に行きます。こんなシラバスだったら、講義はきっと大人気でしょう。出席率もきっと高いと思います。でもただ遊ぶだけでなく、遊びつづく中で「さて?」と少し考える。公園で遊ぶことに熱中できない自分と出会えば「それはなぜか」と考える。生きることの縮図が、そこで再現される一面があると思うのです。少なくとも、大教室の中よりは。いつかどこかで、実践してみたいと思います。

団遊(だん・あそぶ)

「課題解決や理想実現に向け、モノやコトをすることで 変化と刺激を生み近づけること」をモットーに幅広くプロデュース活動中。

<http://danasobu.com>